HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ＪＡ女性組織における公益的活動の展開プロセスとその意義［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	小川, 理恵
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(農学)
Dissertation Number	甲第15751号
Issue Date	2024-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/91874
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Ogawa_Rie_abstract.pdf, 論文内容の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

博士の専攻分野の名称： 博　士（農学）　　氏名　小 川　理 恵

学 位 論 文 題 名

ＪＡ女性組織における公益的活動の展開プロセスとその意義

ＪＡ女性組織は、農村部を中心とした女性のくらしと経済的社会的地位向上等の活動で成果を挙げてきたほか、農産物直売所の嚆矢となった地産地消活動や、高齢者福祉事業の土台となった助けあい活動など、農協事業の新しい展開の基礎活動としても機能を発揮してきた。しかし、高齢化を主因とした活動の担い手の減少により、最盛期には344万人であったメンバー数は41万人にまで減少しており、活動内容のマンネリ化などの課題も指摘されている。とはいえ、地域農業・社会の諸課題への対応に主体的に取り組むことにより、組織活動を活性化させ、地域社会にとっても重要な役割を発揮しているＪＡ女性組織もみられる。

地域社会との関わりについては、ＩＣＡ（国際協同組合同盟）が協同組合原則の第７原則で「地域社会への配慮」を謳っており、日本のＪＡグループでもＪＡ全国大会決議等において、地域との接点強化を掲げている。第７原則制定の背景の１つには、日本のＪＡの地域における総合的な事業展開への国際的な関心があり、ＪＡ女性組織の活動にも注目されてきた。しかし、近年において活動を活性化させているＪＡ女性組織では、共益的活動（ＪＡ女性組織メンバー間の共通利益を追求する活動）から公益的活動（受益者の範囲が地域社会に及ぶ活動）へ、ＪＡ事業とは相対的に独立した公益性を強めてた活動を行っていることに注目すべきである。

そこで本論文では、公益的活動を積極的に展開するＪＡ女性組織活動の展開プロセスと、活動を展開させた要因を、ＪＡの機能やＪＡ女性組織のメンバーの考え方の変化に着目して分析した。そしてそれらの分析結果から、ＪＡ女性組織の公的的活動の意義を明らかにするとともに、ＪＡ女性組織およびＪＡの公益的活動のあり方に示唆を与えようとするものである。

第１章では、公益的活動の視点からＪＡ女性組織の展開過程を整理した。ＪＡ女性組織立ち上げ当初の1960年代は、ＪＡの経営改善と女性の生活環改善が主たる活動だったが、1980年代に入りＪＡ全体が地域に開かれた組織を目指すなか、ＪＡ女性組織で高齢者福祉などのＪＡ事業と結びついた公益的活動が開始された。しかし1990年代になると、社会に貢献する組織としての展望が強く打ち出される一方で、ＪＡ女性組織メンバーの高齢化と多様化が進み、世代間などの考え方の相違を反映した多様な活動が進められる。そのため、ＪＡの現場における地域社会対応への関心の低さや、地域活動に該当するＪＡ女性組織活動の少なさが今日の課題として指摘されている。

第２章では、ＪＡふくしま未来・福島地区のＪＡ女性組織メンバーへの悉皆調査の結果から、活動に関する意識と行動に着目したメンバーの実像を明らかにした。メンバーが多種多様な資格や趣味・特技を有していること、ＪＡ女性組織活動への参加を通した社会貢献活動への意識が一定程度存在することが明らかとなった。また、参加を通して活動への高評価につながっており、メンバーの資質や関心事を把握し、それを活動と結び付けることの必要性が示唆された。

第３章では、ＪＡみっかび女性部フレミズグループを事例に、ＪＡとＪＡ女性部の支援のもと、フレミ

ズグループが新たに立ち上がり、共益的活動から公益的活動へと展開したプロセスの実態を明らかにした。ＪＡみっかびでは若い女性の関係性構築への支援として、２年１期のフレミズカレッジを設立した上で、①フレミズカレッジへ参加を促すフレッシュミズのつどいを開催、②フレミズカレッジでは毎回違うメンバーでグループ化する仕組みの導入と２期連続受講の禁止、③新たなフレミズグループの立ち上げを提案、④フレミズグループの自主的な活動を促進、という段階的な支援を行っていた。ＪＡ女性部もフレミズ活動に専念できる支援を行っていた。こうしたＪＡおよびＪＡ女性部の支援を受けて、フレミズ世代において、構築・深化した関係性を通した新たな女性組織「みかんちゃん」が設立され、料理教室などの共益的活動から食農教育という公益的活動へと活動の幅が広がっていた。

第４章では、ＪＡ高知県女性部大篠支部を事例に、ＪＡ女性組織活動が共益的活動から公益的活動へと自発的に展開するプロセスと個人の変化を明らかにした。同女性部では、班横断の二四六九女士会を立ち上げ、全員が必ず役割を持つ決まりを徹底していた。女士会における共益的活動の積み重ねから、メンバーのなかに、関係性の構築・深化、自己効力感や参加意欲・貢献意欲の高まりが生じ、そこから子ども食堂という公益的活動への取り組みの意思が芽生えていた。子ども食堂ではバイキング形式で料理を提供し、参加者とのコミュニケーションからメンバーの新たなやる気が醸成されていた。ＪＡ女性組織の自主的運営活動を通して、メンバー間の関係性強化と個々の役割分担の定着から参加意識が強まり、公益的活動への取り組みを進め、その活動への地域の評価から、さらにメンバー内で活動意欲が強くなっている。

第５章では、ＪＡ女性組織を牽引するリーダーの実態を、ＰＭ理論を用いて検討した。その結果、ＪＡ女性組織という基盤があるため、集団の維持を図るM行動に重きが置かれていたことが明らかとなったが、他方で変化や決断の場面では課題の達成に直結するＰ行動が実行されていたことも注目された。そこでは、伝え方や表現に工夫が施されており、第３章・第４章の活動展開の各局面で、それぞれのリーダーによるリーダー行動が適切にとられていたことも確認された。

終章では、以上を要約したうえで、ＪＡ女性組織活動が公益的活動に展開するプロセスについて、その要因を分析した。１つには、メンバーの多様性を考慮・理解した今日的な新たなＪＡ女性組織づくりが重要であり、その組織化の中でメンバー間の関係性が強化されている。２つには、メンバーの個々の能力を正しく把握し、それぞれの活動に対する思いを形にする組織活動の実践が必要である。メンバー１人１人の役割発揮が明確化することで、参加意欲が高まっていたのである。３つめは、地域諸組織との関係性の強化である。食農教育や子ども食堂への取り組みには小学校や自治体との協力がみられ、ＪＡ組合員からの食材提供や栽培技術の提供など、公益的活動におけるＪＡらしさが発揮されていた。４つめはリーダーのあり方であり、ＪＡ女性組織という特性から集団維持を重視しつつもリーダーの決断も必要であった。

こうしたＪＡ女性組織が公益的活動に取り組む意義については２点あげられる。１つは、ＪＡ女性組織にとっての意義である。ＪＡ女性組織が共益的活動から公益的活動への活動の幅を広げることにより、メンバーが活動へのやりがいを高め、活動への積極的な参加が実現するなど、ＪＡ女性組織が活性化していた。メンバー数が激減し活動のマンネリ化が課題となるなか、公益的活動に取り組むことはＪＡ女性組織の今後の方向性の１つになり得ることを示した。もう１つは、ＪＡにとっての意義である。ＪＡみっかびみかんちゃんの食農教育や、ＪＡ高知県女性部の子ども食堂の活動を通して、それまでＪＡと関わりが薄かった地域住民がＪＡの存在を強く感じるなどＪＡの評価の高まりに直結していた。

ＪＡグループは、地域社会における役割発揮を掲げながらも、経営悪化や人員不足により現状では十分な実践には至っていない。そのため、ＪＡ女性組織に対しても十分な支援を行うことはできていないが、ＪＡ女性組織の独自の運営が地域社会におけるＪＡによる公益的活動を補っている。そのＪＡ女性組織から生まれた公益的活動を正当に評価することは、ＪＡ女性組織の活性化の方向性と同時に地域社会におけるＪＡのあり方においても示唆的なこととみられる。